



夏の暑さが通り過ぎ、涼やかな風が変わっても、ハロウィンが過ぎれば、瞬間に寒さが厳しくなっていく。冬の準備に追われる中、捌いても捌いても減らない仕事に、辟易させられる日々が続いていた。今日も机に大量に積まれた書類の山に、イギリスは力なく項垂れた。

全てを投げ出し逃避した心情を押し殺している内に、卓上カレンダーと目が合った。

緩慢な仕事でカレンダーを手繰り寄せたイギリスは、大きく赤丸で囲まれた日付を凝視した。

そして、仕方がないと言いたげに薄く笑うと、緩々と体を起こして気合を入れ直すのだった。

あらかた仕事の目処が付いたのは、クリスマスまで一ヶ月を切る頃だった。

それは、カレンダーに赤丸された日付と一緒にあった。久々の休暇の過ごし方は、すでに決まっている。

何か月も前からの約束に、胸を躍らせながら向かった先は、自国とは別世界のように暖かだった。

日中でも寒波が吹き付ける北国では、雪が積もるのも時間の問題だ。

それなのに、ドーバー海を渡り、少し南下すれば、僅かに肌寒いものの、イギリスには十分温かい気温だった。

大通りの並木道は色とりどりに紅葉し、鮮やかに感嘆させられる。

吹き抜けていく風は、まだ残暑の名残を感じられる。

カレンダー上では、全く同じ日付なのに、一ヶ月近くも季節がズレているような感覚に陥る。

水のように澄み切った空は晴れ渡り、名残惜し気に落葉する木々を眺めていたイギリスは、どうしても苦笑いが零れてしまう。

そして、じわりと汗ばんだ額に、着込んできたコートの前ボタンを外した。

完全に脱いでしまうと荷物になるため、前を開けるだけで留めたのは、目的地まで、後僅かだからだった。

楽しみのあまり、予定よりも早めの到着になっている。約束は夕方なのに、まだ昼を数刻過ぎたばかりだ。

しかし、いざ近くまで来てしまうと不安が生じる。シエスタ中かとか、それ以前に不在かもしれないと思うと、少しだけ歩調が重くなる。

もう少し陽が傾くまで、どこかで暇を潰そうかと悩むものの、逸る気持ちは抑えるのも困難で、足は一直線に目的地に向かうばかりだった。

脳内での葛藤など、微塵も感じさせないポーカーフフェイスは、すれ違う人々に気付けられることもない。

しかし、不意に飛び込んできた声に、反射的に足が止まる。「後もうちょっとやで〜！」

大通りの反対側からでもよく通る声は、聞き間違えるはず